

銘木市に見られる北海道産広葉樹材

(10) ホオノキ

道総研林産試験場 佐藤 真由美



銘木市で「ホホ」と称される樹種は、モクレン科モクレン属に属するホオノキです。どうして「ホホ」なのかと疑問が湧きますが、この樹種は、1960年刊行の図鑑¹⁾では「和名ほほのき、別名ホホガシハ、ホホ、ホホバ…（多数挙げられているため一部のみ抜粋）」と記載されており、明治時代発刊の文献²⁾でも「ほゝのき」と書かれているので、元来ホオノキで、1960年代以降に、恐らく現代日本語で読み書きしやすいように、ホオノキと表記されるようになったのでしょう。この樹種は、国産樹種の中でも飛び抜けて大きい葉を着け、昔から人々はこの葉を食品を包むために用いてきました。このため、食物を包む、「包（ホウ）」が語源とも言われますが、中国大陸から漢字の「包」が日本の一般庶民に伝わる以前から、ホオノキの葉は「つつむ」ために用いられ、他の植物と区別されて当然呼び名もあったはずです。ちなみに、北海道先住民のアイヌ語では、この樹種は「プシニ（臭い木または匂う木の意）」と呼ばれていて、ホホという呼称との関連は無さそうです。「葉ひろ」がなまってホホとなったという説³⁾もあり、やや強引ですが「包の木」よりは説得力があるような気がします。本編では、以降「ホオノキ」の呼称を用います。

にも思います。

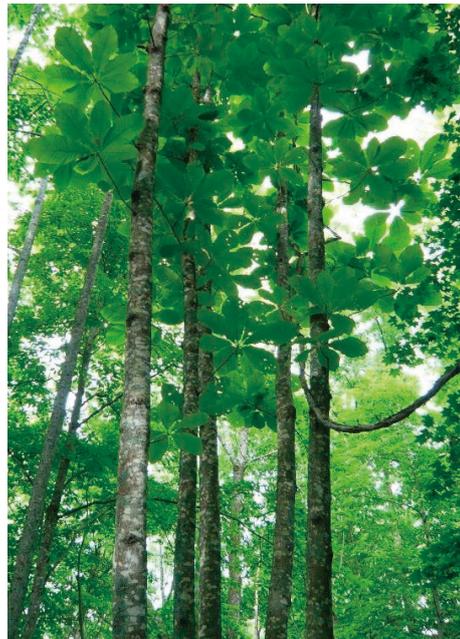


写真1 林内のホオノキ立木

ホオノキは林間にできた隙間（ギャップ）で芽吹き旺盛に背を伸ばす陽樹で、林縁などで単独または株立ちで散発的に生えているのを見かけます（写真1）。枝を広げるよりも背を伸ばし、その大きな葉を水平に並べて太陽光をキャッチする戦略でしょう。他の植物を寄せ付けないアレロパシー物質を分泌するため、周囲に競合する木が育ちにくいことも加わって通直完満な樹幹となり、展示会場に並ぶ原木も大径ではなくとも素性の良いものがほとんどです（写真2）。曲がりや細り、枝痕、入皮等のいわゆる欠点が少なく、樹皮も平滑で、上品な印象があります。フレッシュな木口面は微妙に緑色を帯びた独特の色合いを持ち、風の無い晴れた日には、辺りに一風変わった香りが漂います。樹皮や葉等からは薬効成分や抗菌成分³⁾が知られていますので、それらの化学物質が揮発して香るのでしょう。花にも香水に使われるような良い香りがあり、「包」より「芳」の漢字のほうが当てはまるよう



写真2 ホオノキ原木（2022年4月）

銘木市では、毎回全体の1~2%程度、コンスタントに出材されます。現行の森林施業では、広葉樹材は針葉樹人工林施業や林道開設などに伴う伐採によって派生的に出ることが多いようですが、確かに、林道脇などいかにも支障木になりそうな立地にスラリと立っているのが、収穫されやすいのかも知れません。植物図鑑などでは、直径1mにもなる樹種であると記されていますが、昨今展示会場に並ぶ原木は直径30cm前後のものが数本組になっているものが多く、40cmあれば太いほうだと感じます（写真2）。本数の割には、他樹種に比べ材積が少ないのはそのためでしょう。しかし、太目の原木は思ったより高価に買われていくことがあります。写真3の原木は長級2.6m、径級48cmで、立米単価20万円の値が付ききました。目立たない樹種ですが、侮れません。



写真3 高評価の原木（2022年4月）

ホオノキは、食品を包む葉や生薬としての樹皮ばかりでなく、木材も古くから利用されてきています。展示会場の原木の変色気味な木口でははっきりとは分かりませんが、製材すれば、淡色系で緑色がかった木材は他の樹種では見られません。世界的に見ても、ホオノキという樹種は日本特産、または中国大陸の一部や千島列島南部といった限られた分布とされ、国外では観賞用に植えられているものしかありません。同じモクレン科の道産樹種であるキタコブシ（銘木市では「コブシ」）の材色は緑色系とは言えず、北米に分布するモクレン科のユリノキという用材樹種の材色は黄色味がかっています。個人的には、ホオノキ材は和風の色味だと感じています。気乾密度は平均0.49g/cm³と比較的軽軟な散孔材で、きめが細かく均質です⁴⁾。寸法安定性に優れ、加工性、仕上がりも良いことから、建築用材であれば建具として、また、各種の道具や漆器木地、彫刻用材等、果ては漆や金属工芸用の炭まで、古今の図鑑、解説書やインターネット上には、

細かく挙げていたら切りがないほどの幅広い用途が記されています。

筆者の記憶では、小学校の図画工作の授業で与えられた版木がホオノキ材でした。彫刻刀で彫るのに余計な気遣いや力を加える必要がなく、子どもの手でも簡易に彫り込むことができました。現在、筆者が使っている包丁の柄もホオノキ材で、身近なところにちよくちよく使われていることに気がきます。

近頃は、一部の若者たちの間で日本刀がブームになっているようですが、日本刀の鞘はホオノキ材と決まっています。理由については明解な資料は見つかりませんが、金属に触れても錆が出ないと言われています。どちらかというと、重い刀を納めて持ち運ぶものとして、軽さと相応の強さを併せ持ち、表面仕上げ性能に優れ漆の乗りも良いところが適していたのではないかと思います。朴歯の下駄も絶滅危惧種とはいえ生き延びており、これも軽くて加工性が良いことから与えられた用途でしょう。道内のバター工場で使われるカッティングボードに似た道具がホオノキ材製だったりして、職人に言わせれば、バターを扱うのにこの材が最適とのことでした。目立たないようで、案外、特殊用途の需要がある樹種であると言えます。

面白いと思うのは、野球のバットの中にホオノキ材で作られているものがあることです。野球のバットといえば、強度性能の高いタモ、カバ等の世界と考えますが、守備練習のノックで監督やコーチが使うには、軽量でコントロールしやすいホオノキ材ノックバットが喜ばれるそうです。広葉樹材は英語でhard wood＝硬い木材というように、カバ、ナラ、タモといった強度の高い樹種、脚物家具に使える樹種が花形と見られがちですが、程々に軽く柔らかいホオノキ材が、かえって人の手になじむ道具として使われてきていることも重要です。花形ではないが故に乱獲されることもなく、現在に至るまで手頃な中小径材出材、利用が続いているのだと考えます。

■参考文献

- 1) 上原敬二：「樹木大図説」，1，有明書房，東京，pp. 1074-1077（1961）。
- 2) 農商務省山林局編：「木材ノ工藝的利用」，大日本山林会，東京，p. 1217（1912）。
- 3) 森満範，青山政和，土居修一：林産試験場報，14，1，pp. 1-5（2000）。
- 4) 日本木材加工技術協会：「日本の木材」，pp. 72-73（1989）。